

## 文脈と塗り潰し：真理の多元論を擁護する

米倉悠平 (Yuhei Yonekura)

千葉大学

真理の担い手（以下ではこれを「主張 (claims)」と表記する）が真である仕方のうち少なくとも最も重要な候補の一つが事実との対応であることにはほとんど疑いがないだろう。すなわちたとえば「この机は白い」という主張は、この机が白いという事実が世界に成立しており、その事実と対応しているがゆえに真であると考えられるわけである。こうした、それらのおかげで主張が真であるところのものを真理の基盤性質と呼ぼう。しかし、真理の基盤性質にはただ一つのものがあるのだろうか、それとも、複数のものがあるのだろうか。真理論における真理の多元論と呼ばれる立場は、このうち後者を主張する (Pedersen & Lynch 2018: 543)。真理の基盤性質は、その真理を担う主張が所属する領域 (domain) ごとに異なっていてよいと言われるのである。(以下ですぐこの立場を簡単に動機づける。)

しかしながら真理の多元論に対してはその困難を指摘する重要な批判が寄せられている。そこで本発表では、重要な二つの批判を——私に対応を思いついた二つに限られるが——取り上げ、それらからこの立場を擁護することを試みる。

本発表は以下のように進む。**第一節**では本発表の議論の準備として、まず真理の多元論を改めて導入した上で、私たちが真理の多元論を必要とする事情を確かめる。標準的にはその事情は「範囲問題」解決の必要性として述べられるが、本発表ではそれにほぼ相当しつつもやや異なるルートを辿ろう。以下である。道徳的判断や道徳的探究といった私たちが時に行う第一階の道徳的な言語的実践の正当性を強く脅かす、一つのメタ倫理学上の立場が知られている。道徳的錯誤論 (moral error theory) である。道徳的錯誤論によれば、私たちが行う通常的道徳的主張はどれも真でない。私はこの立場に対する反論のため、道徳的構築主義と呼ばれるメタ倫理学理論を私たちは採用する必要があると考えている (この議論の詳細については発表時間の制約から省略する)。この理論の中核となるものは本発表において以下のテーゼとして理解される (Moral Constructivism)。

(MC) ある道徳的主張が真であるのは、その主張が、私たちが占める見地において実行されるある特定の手続きの結果である場合であり、その場合に限られ、そのゆえのことである。

以下で見る事情から (MC) を採用する者は真理の多元論を併せて採用する必要があるように思われる。その事情を見よう。(MC) によれば、道徳的主張が真であるのは、その主張が、私たちが占める見地において実行されるある特定の手続き——「構築手続き」と呼ぼう——の結果であるがゆえのことである。もし仮に構築主義が真理の一元論と併せて採用されるとすれば、上記テーゼは道徳的主張を超えて、あらゆる種類の主張にまでその範囲を拡張することになる。するとたとえば「この机は白い」という主張の

真理も、あるいは他のさまざまな偶然的主張も、それらの主張が、私たちが占める見地において実行されるある特定の手続きの結果であるがゆえのことだという理解を私たちは強いられる。しかし偶然的主張のクラスには、その真偽が私たちの側の事情によって決定されるとは考えにくい主張がきわめて多数含まれるだろう。したがって道徳的構築主義者には真理の多元論を併せて採用する必要がある。要するに私は、道徳的錯誤論の脅威を免れるため、私たちには真理の多元論を採用する必要があるのだと考えている。

**第二節**では真理の多元論に対する二つの重要な批判を見る。第一は「痛みを引き起こすことは悪い」といった、複数種類——心的、物理的、道徳的——の概念からなる「混合された」原子的主張の所属する領域を私たちは、その主張を構成する概念を見ることだけによって一つに絞り込むことができないように思われるという批判である (Sher 2005: 321f.; cf. Lynch 2004: 399; Wyatt 2013: 230; 須田 2024: 89f.)。第二は「地球の年齢は七千歳である」といった主張に関わる批判である (須田 2024: 90–92; cf. Lynch 2004: 399)。それによればこの主張は、事実との対応が真理の基盤性質であるような領域と、聖書との調和 (coherence) が真理の基盤性質であるような領域とのどちらに所属するのかが、その主張を構成する概念を見るだけではわからない。そして、一方の領域ではその主張は偽だが、他方の領域では同じ主張が真であることになる。領域を一つに絞り込めない限り真理の多元論者は、ある一つの主張が真であると同時に真でないという「厄介な可能性」 (Lynch 2009: 82) を許容せざるをえないことになってしまう。

本発表の後半では、以上の二つの批判に対する対応を提案する。**第三節**では主張の所属する領域をその主張が置かれた文脈に訴えて特定するという議論を提案し、一つの反論から擁護した上で、しかしこの議論方針には避けがたい限界があることをも見る。主張は大抵の場合、単独で行われたり吟味されたりするのではないという事実を私たちは見過ごすべきではない。「痛みを引き起こすことは悪い」という主張は、たしかにこの主張を構成する概念だけを見ても所属する領域は絞り込めない。しかし主張の置かれた文脈が、この主張をたとえば道徳的領域に所属するものとして捉えることを私たちに促す。(本要旨では反論からの擁護は省略する。)しかし、「地球の年齢は七千歳である」という主張はどうだろうか。主張の置かれた文脈を用いる論者は、この主張について、事実との対応が真理の基盤性質であるような領域に所属するか、それとも聖書との調和が真理の基盤性質となるような領域に所属するかは、この主張が置かれた文脈に応じて変動するのだと述べなくてはならない。するとここでは置かれる文脈がただ一つではないために、一つの主張がある文脈においては偽であり、別の文脈においては真であると考えなくてはならなくなってしまう。

そこで**第四節**では、主張の置かれた文脈を持ち出す議論に付け加える形で、主張の所属する領域の一部を他の領域によっていわば塗り潰すことができる——ただし一定の重要な条件を満たす場合に限り——という議論を提案する。方針は以下である。私たちは宗教的領域を縮小させることでその承認を部分的に——「地球の年齢は七千歳である」という主張が所属する部分についてだけ——取りやめ、取りやめた部分についてはそれを物理的領域によって塗り潰し、吸収させることができる。このとき「地球の年齢は七千歳である」という主張は単に、事実との対応を欠くゆえに偽である。この主張が聖書との調和のゆえに真であるということはない。聖書との調和が真理の基盤性質となるような領域を私たちは部分的に消去するのである。しかし、この対応には次の問題がある。私は「私たちは平和のうちに生

存する権利を持つ」といった道徳的主張に関して、それは私たちが行う構築手続きのゆえに真であると考えている。「地球の年齢は七千歳である」という主張に関しては事実との対応を優越させ、「私たちは平和のうちに生存する権利を持つ」という主張に関しては構築手続きを優越させることの正当性、資格、権利は果たして私たちにあるのだろうか。宗教的主張に関して直前で取った冷淡な対応を、私たちは道徳的主張に関してはなぜ取らなくてよいのだろうか。本発表は最終的に、この問題に十分な仕方において対処することを目指す。

参考文献の一部（本要旨において言及したもののみ）

Lynch, Michael P. (2004). Truth and Multiple Realizability. *Australasian Journal of Philosophy* 82 (3):384–408.

Lynch, Michael P. (2009). *Truth as One and Many*. Clarendon Press.

Pedersen, Nikolaj J. L. L. & Lynch, Michael P. (2018). Truth Pluralism. In Michael Glanzberg (ed.). *The Oxford Handbook of Truth*. Oxford University Press. 543–575.

Sher, Gila (2005). Functional pluralism. *Philosophical Books* 46 (4):311–330.

Wyatt, Jeremy (2013). Domains, plural truth, and mixed atomic propositions. *Philosophical Studies* 166 (S1):225–236.

須田悠基（2024）『真理の本性：真理性質の実質性を擁護する』勁草書房。